昨日の新聞から３２４　平成二十六年三月三日（月）

『山への旅』（牧野文子・アディン書房）を読む

――　可児藤吉が戦場に持っていった「あるもの」とは？　――

日曜夜七時三十分からＮＨＫで放映している番組を知っているでしょうか。「ダーウィンが来た」という番組です。毎週、いろいろな生き物を取り上げて、その生態について紹介している番組です。先日はアナグマについて紹介していました。その前はニュージーランドに棲むキーウィという鳥について紹介していました。

アナグマやキーウィも含めて、この番組で紹介される動物のほとんどはダーウィンとは何の関係もありません。それでもダーウィンが番組名に使われているのは、彼が世界で最も有名な生物学者であり、生き物を紹介する番組のタイトルにシンボリックに使用するのにふさわしい人物だからです。

では、なぜダーウィンはそんなにも有名になったのでしょうか。一番の理由は彼が進化論をとなえたことにあります。生き物は競争に勝ち抜くために環境により適した形に進化していくのであり、この世界を支配しているのは「競争の原理」であるとダーウィンは考えました。

「進化論と言ったらダーウィン、ダーウィンと言ったら進化論」と世界中で言われているわけですが、実はもう一人、進化論で有名になった人物がいます。日本の生物学者の今西錦司です。彼は、この世界を根底にあるのは「競争の原理」ではなく「調和の原理」だと考えました。生き物は、競争に勝つためではなく、それぞれがそれぞれの属する環境により適応した生き方を身に付けるために進化したと考えたのです。

この日本を代表する生物学者の本を昨年末から集中的に読んでいます。その中の一冊、『人間以前の社会』の序文の一節は、その後の自分の読書生活に大きく影響を与えることになりました。それは次のような一節です。

わたくしは本書を、サイパンで戦死した一人の友人にささげる。可児藤吉――かれのように熱烈な批判と、誠実な助言とを惜しまなかったひとを、わたしはふたたび見いだしうるであろうか。彼なくして、いまわたくしの学問の道はさびしい。

日本一の生物学者、今西錦司をして「彼なくして、いまわたくしの学問の道はさびしい。」と言わせる可児藤吉とは、いったい何者なのか、という問題意識が僕の中に生まれたのです。

可児　藤吉（かに　とうきち、1908 年 1 月 1 日 – 1944 年 7 月 18 日）は岡山県勝田郡勝間田町に生まれた日本の先駆的な群集生態学者。京都大学農学部卒。河川の蛇行と、河床形態である瀬と淵に注目し、「河川形態型」を提唱した。また、昆虫が生息するそれぞれの環境を研究することで今西錦司とともに「棲み分け理論」の基礎を築いた。河川形態型を発表した同年、太平洋戦争において３６歳という若さでサイパン島にて戦死した。

これしか情報がないのです。写真もありません。何とかしてこれ以上の情報を得たいと思いました。いろいろ調べていくと可児藤吉のことが『山への旅　――りんどうは空を見ていた――　』という本に詳しく書かれていることがわかりました。絶版で手に入りにくい本でしたが、北海道の書店に一冊あることがわかり、早速注文しました。

この本の中には可児藤吉を知る上でとても役に立つエピソードがたくさん含まれていました。その中の一つにサイパンに向かう前に牧野文子さんの家に可児藤吉が泊った時のエピソードがあります。

可児藤吉は戦場に、ある物を持っていこうとしたのです。そして牧野さんはその「あるもの」を入れるための袋を可児藤吉のためにすぐに作りました。「あるもの」とは鉛筆三十本です。可児藤吉は次のように言ったそうです。

どこへ、どんな島へ行くのかしれないけれど、そこでまた何か出来ることを勉強しよう、ノートと鉛筆だけはうんと持っていくのだ

戦場に鉛筆を持っていった可児藤吉の勉強への情熱に感動しました。

可児藤吉はサイパンで１９４４年７月１８日に亡くなります。サイパンでの戦争の歴史を調べていくと１９４４年７月はサイパンの戦史にとって特別な月であることがわかりました。１９４４年７月７日に世界史上、まれにみる愚かな作戦が実行されます。当時サイパンにいた日本兵のほぼ全員の約４０００人が、兵力において圧倒的にまさるアメリカ軍に万歳を叫びながら突入していったのです。この中に可児藤吉が含まれていた可能性は充分にあると思われます。

牧野さんは可児藤吉戦死の知らせを聞いて追悼の文章を書きました。

――暁闇に月貌冷たく、明けの明星鋭く光るのを、まともに東の空に見て、急に目がはっきりさめてしまう。（中略）私を描いてもらった絵の入れてあった額をはずし、それに、かつて四子さん（牧野四子吉）がコンテで描いた可児さんの肖像画（『可児藤吉全集・全一巻』の口絵として使用されている）を、直ちに出してもらって入れ替える――背から首筋にやや力を入れて、幾分うつむき加減の姿勢、じっと一ところを見詰めて瞳を上げている顔、並んだ細い額のしわにどこか暗さを浮かべる陰がさし、唇の左端にいつもの癖でパイプをくわえている――ワイシャツにネクタイの七分横向きの上半身。今にもパイプをくわえたままで下唇を開いてものをいいそうな、あの、なつかしい可児さん、私たちのお仲間、可児藤吉さん！　そこにすわって、その姿勢で、仲よく話し合うことが出来たのは、もう帰らない過去になりました。あなたのような敬愛する

友を持つことができた私たちは、本当に仕合わせでした。あのあなたの好きな御岳山に、一緒に登った十日間の旅のことを思い出します。徳田さん森下さんも一緒でしたね。みんなが落ち合う前に、私たち二人が木曾福島の駅に着くのを出迎えて待っていて下さったときにも、パイプを口にくわえて改札の柵に、その姿勢、そのまなざしで、私たちの姿を見付けると、にこっと微笑んだかと思うと、その次の瞬間、とても嬉しそうに目尻にしわを並べて、一層嬉しそうな笑顔をみせたあなたでした。（中略）それから始まった御岳山行の十日間のことを、ことの外なつかしくあれもこれもと思い出します。私はこんな日が来ることとは知らずに、あの山旅のことをノートに書きました。近くそれを読み返さなくてはなりません。なつかしさが込み上げて来るのです。もうどうしたって会えないというのは打ち消すことの出来ない現実です。声を限りに呼んでいいものだったら、ああ、何一つ術のないことです。あなたとは永遠に、あの日、別れてしまったのでした。

応召後休暇を得て、間もなく船出しそうで一時の別れにと、うちで一泊されて、名残りを惜しみ合ったあの日、どこへ、どんな島へ行くのかしれないけれど、そこでまた何か出来ることを勉強しよう、ノートと鉛筆だけはうんと持っていくのだといったあなたに、黒いラシャのありぎれで、三十本ばかりもあなたが用意した色鉛筆や黒い鉛筆を入れる大きな鉛筆袋を私は急いでミシンで縫って、あなたに持っていってもらったあの日は、本当にあなたにさよならしてしまった日なんですね。もう随分食糧が乏しかったけれど、小豆をなんとか手に入れ、森下さんが貴船口の藤崎さんで都合してもらって来た砂糖で、どうにかお善ざいがたけました。みんな、居合わせた人たちも私たちも二杯ずつ、あなたには三杯食べてもらいました。「うまいわ、ハッハッハッハッ……」と藤吉さんは言いましたね……。肖像画を見ていると、つい話しかけてしまうのです。

ああ可児藤吉という一個人の人間は、この地球上から消えてしまった。「トウキチ七ガツ一八ヒマリアナホウメンニテセンシス」の電文を藤吉さんの家から私たちに打電して来た。「可児さん戦死」、これだけのことが、四子さんも私も、二人とも頭の中でぐるぐる回りしている。戦争の悪夢が私の胸を締め付ける。後頭部が、きゅーんと痛いのに気付く。晴れた秋の空をちょいと見上げても、わき出す泉のように、悲しみがこんこんとわいて、わいて、止めどがない。ただ親愛の情を抱いているからばかりではない、人間可児藤吉を敬愛していた私たちである。その人となりの麗しさは、たぐいまれな存在であった。謙譲であった。優しかった。師には恩愛を忘れない人であったし、後進が求めれば所信を説いて導く心掛けがあった。友情にあつく、いつも与える側に立つ喜びを持つ人であった。聡明な頭のいい人というのではなくて、熱情を傾けて勉強するタイプの人であった。つまり勉強が好きだった。その勉強の成果は、素晴らしいものがあるときいている。勉強が人をしのいでいても、どこまでもへり下って他人を損なうということがない。奇麗な行いを終始一貫行って生涯を閉じたのである。美しい人間を、一人失ったというだけでも、戦争は呪われるべきである。

今年度最後の「昨日の新聞から」を通して伝えたいことは二つあります。

一つは、可児藤吉を知ることで、勉強したくてたまらなかったのにそれができなかった人の思いを知ってほしいということです。もう一つは、一冊の本との出会いを通して生まれた問題意識を掘り下げることをしてほしい、自分に深い問題意識を抱かせる本とぜひ出会ってほしいということです。

最後に僕の大好きな話を紹介しましょう。

神学者、トマス・アクィナスがパリの町を生徒と一緒に散歩していた時の話です。

先生、ごらんなさい。パリはなんと美しい町ではありませんか？　この町を支配したいとお思いになりませんか？

トマス・アクィナスは何と答えたでしょうか。

私はそれよりもヨハネス・クリゾストモスの『マタイ福音書説教』を手に入れたい。

と答えたのです。みなさんにとっての『マタイ福音書説教』はどの本でしょうか。パリの町と取り換えてもほしいと思える一冊の本と、ぜひ出会ってください。

牧野文子さんのご主人の牧野四子吉さんが描いた可児藤吉の肖像画